

前期ローマ帝国

元首政（プリンキパトゥス）

共和政の制度を利用

厳密には公人としての皇帝は存在しない。すべて私人。

ユリウス＝クラウディウス朝（前 27－後 68）

アウグストゥス（前 27-後 14）

アウグストゥスの体制

元老院管轄と皇帝管轄に分ける

元老院管轄の属州：アジアやシキリア等

属州総督を派遣

皇帝管轄の属州：シリアやゲルマニア等

属州長官を派遣

共和制度に基づく

軍隊の独占

執政官命令権：イタリア半島における支配権

執政官格命令権：皇帝属州における支配権

執政官格上級命令権：元老院属州における支配権

護民官職権：ローマ市内における支配権と拒否権

大神官

皇帝官房：解放奴隷

ティベリウス（14-37）

カリグラ（37-41）

クラウディウス（41-54）

ネロ（54-68）

四皇帝対立

ガルバ（68-69）

オトー（69）

ウィテリウス（69）

フラウィウス朝（69-96）

ウェスパシアヌス (69-79)

属州出身者の積極的登用

特に西方出身者

ティトウス (79-81)

ドミティアヌス (81-96)

五賢帝時代 (96-180)

騎士身分の登用

ネルウァ (96-98)

トラヤヌス (98-117)

ハドリアヌス (117-138)

アントニヌス=ピウス (138-161)

マルクス=アウレリウス (161-180)

ルキウス=ウェルス (161-169)

パルティアとシリアをめぐる抗争

マルコマンニ人の侵入

コンモドゥス (180-192)

ヘラクレスに扮して、1万2千名の剣闘士を殺す

剣闘士に暗殺される

混乱

ペルティナクス (193)

解放奴隷の子

マルクス帝の時代に元老院議員

近衛軍の推薦により皇帝に

改革を断行→近衛軍の不满→暗殺

ディディウス=ユリアヌス (193)

セウエールス朝 (193-235)

セプティミウス=セウエールス (193-211)

父はカルタゴ人の子孫

アントニヌス時代に一族に元老院議員  
騎士身分出身  
パルティアの都クテシフォン占領  
スコットランドに遠征→エブラクム（ヨーク）で死去

ゲルマニア方面軍とシリア方面軍  
197-199 パルティアに大勝  
ブリタニア防衛  
パピニアヌス・ウルピアヌスを法律顧問に  
軍の肥大化

カラカラ（211-217）

ゲタ（209-212）

弟ゲタを殺害

212年 アントニヌス勅令

属州民にローマ市民権付与

↑

増税が目的：遺産相続税

や奴隷解放税

↓

税収の減少と軍団兵の補充の減少

マクリヌス（217-218）

カラカラを謀殺

パルティア戦を継続

パルティアとの講和条約に対する不満

メソポタミア放棄

ヘラガバルスの乱

→小アジアで護衛兵により殺害

ヘラガバルス（218-222）

太陽神の神殿の最高神官

男女5名と結婚

ユリア=ドムナと対立→殺害される

セウエールス=アレクサンデル (222-235)

近衛軍長官ウルピアヌスの補佐と母ママイア

ゲルマン人とササン朝ペルシアの圧力

ゲルマン人との平和を金であがなおうとする

↓

軍の不満

↓

暗殺

軍人皇帝時代始まる